

バックラッシュの嵐に抗する場を ——『インターセクション』第3号に寄せて——

南 川 文 里

同志社大学都市共生研究センター（MICCS）の紀要『インターセクション』第三号が完成した。この巻頭序言を執筆している 2025 年 2 月現在、世界は大きな混乱のただ中にある。とくに、2025 年 1 月 20 日に第 47 代アメリカ合衆国大統領に就任したドナルド・トランプは、「1 日目は独裁者となる」という予告どおり、少数者や移動者の権利を保護する制度を次々と廃止し、非正規移民やトランスジェンダー当事者をはじめとする少数者の存在までも否定する暴挙に出た。その影響はアメリカ国内にとどまらない。ジェノサイドや侵略戦争に対して歴史的文脈を全く無視した「解決策」を提案して国際社会を混乱に陥れ、ヨーロッパの極右勢力を支持して各国の人種主義や排外主義を扇動している。これらの一連の行動の背景には、植民地主義・資本主義・人種主義・性差別主義・異性愛主義などが歴史的にもたらしてきた負の遺産を徹底的に無視する態度があるのはあきらかだ。人権保護や国際協調の蓄積を無視する過剰なバックラッシュに直面し、各地の少数者は「いかに生き延びるか」を模索せざるをえない状況に追い込まれている。

2024 年度の MICCS は、昨年度に引き続き、人間文化研究機構「グローバル地中海地域研究」拠点プロジェクトを中心とした活動を行ってきた。境界を越えて複数の文化が入り乱れる「地中海世界」へのまなざしをグローバルな現象へと拡張する本プロジェクトでは、とくに越境者がもたらす抵抗とオルタナティブなヴィジョンに着目してきた。本年も、海外からの研究者を招聘したシンポジウムや講演会の開催、共同研究の推進、そして各メンバーの研究活動を通して、学際的で地域横断的な思想や実践の可能性を展望してきた（その詳細は、MICCS のホームページなどをぜひ参照いただきたい）。今号では、韓国から高秉權（コ・ビョングォン）氏を招聘した公開講演会にもとづく特集、アブデラリ・アジャット氏およびニック・カプール氏の公開講演記録、MICCS メンバーによる論文と翻訳、そして新刊書の解題、書評など、多彩な論考が集まった。いずれの原稿も 2024 年内に書かれたものであるが、それが示唆する射程は、2025 年以後のバックラッシュの嵐を「生き延びる」だけでなく、それに抗する場をいかに構築するのか、という問いに開かれている。

公開講演会「世界に声なきものはいない、その声を聞けない者がいるだけだ」では、著書の日本語版『黙々——聞かれなかった声とともに歩く哲学』（明石書店、2023 年）を刊行した高秉權が、同書を執筆した背景として、ノドゥル障害者夜間学校での活動から「声を聞く」

ことへの思索を深めてきたことが語られる。渡邊琢、北川眞也による応答および質疑を通して、「声を聞く」ことに向き合うことで切り開かれる運動と闘争の地平は、「声」を無視することで支配を確立しようとする者の対極にあることが再確認されるだろう。

アブデラリ・アジャットの講演「レイシズムを罰する？ 反人種差別法の運用と司法のバイアス」では、ヨーロッパ各国における反差別法の運用面の課題とその背後にある「制度的レイシズム」の所在を明らかにしている。ニック・カプールによる講演「The 1960 Anpo Protests and the Origins of Contemporary Japan」では、1960 年安保闘争のなかで確立した市民運動に対する制度的抑圧と、これに抵抗するアートの可能性を論じている。

また、上野貴彦・藤田雅美の論考「移住という「全体的社会的事実」に向き合う都市へ——スペインにおける滞在正規化、間文化都市、社会的連帯経済の連関から」では、スペイン都市の非正規移民に関わる取り組みを取り上げ、世界的な課題となりつつある「非正規移民問題」への包括的アプローチの可能性を探る。上野は、現代ルーマニアでの農業移住と農村の関係性を論じた論考の翻訳も紹介し、移住と開発という古くて新しい課題の一側面を示している。2017 年に発表されたジャスビル・プア「トランプ時代のホモナショナリズム」の日本語訳は、トランスジェンダーのあからさまな「スケープゴート化」を通して「性をめぐる分断統治」が図られる現在だからこそ、保井啓志による丁寧な解題とあわせて読まれるべき論考であろう。そして、宮田伊知郎は、自身が訳したブライアン・サイモン『ハムレット工場火災』とベストセラーとなった J・D・ヴァンス『ヒルビリー・エレジー』を対比することで、2025 年 1 月に合衆国副大統領となったヴァンスのカラーブラインドな視線が何を見落としているのかを明らかにする。

これらの論考に加えて、3 編の書評を掲載した。アジア系アメリカ人の「暴力・消去・抵抗」の歴史、ホロコーストの植民地主義的な起源、フランスの社会主義者ジャン・ジョレス像の再解釈など、いずれも歴史・哲学・思想の深みから現在をとらえ直す力を喚起する。

あからさまな、そしてあきらかに過剰なバックラッシュの時代には、もともと脆弱な足場しか持たない少数者は、多方面から繰り出される攻撃に翻弄されるばかりであるかもしれない。それでも、今号が、少しでも堅固な足場を再建し、小さなつながりから抵抗への足がかりとするような場を作り出す営みの一助となることを願っている。